

大学生は中学・高校におけるキャリア教育を どのように評価しているのか —中等教育におけるキャリア教育、進路指導、特別活動の経験に注目して—

How Do College Students Evaluate Career Education in Secondary Schools?:
Focusing on Their Experiences of Career Education, Career Guidance,
and Special Activities in Secondary Education

菊 池 美由紀

Miyuki KIKUCHI

東 岡 達 也

Tatsuya TOOKA

丸 山 和 昭

Kazuaki MARUYAMA

1. 問題の所在

本稿の目的は、中等教育と高等教育の接続の観点から大学におけるキャリア教育の在り方を考察することである。

1999 年の中央教育審議会答申、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」において「キャリア教育」という文言が初めて登場して以来、20 年以上が経過した。この答申では、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てるための教育」をキャリア教育としたうえで、「小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」こと、「その実施状況や成果について絶えず評価を行うこと」の重要性が示されている。1999 年の答申をきっかけに、初等中等教育段階では教科教育、特別活動、進路指導などさまざまな教育活動を通じてキャリア教育が実施されるようになった。キャリア教育の実態を把握するための学校調査や、教育効果を捉えるための児童・生徒に対する調査も行われている。

しかし、これまでの中等教育におけるキャリア教育の効果検証は、在校生に対する調査が中心であり、卒業生、特に高等教育進学者に対する調査は少ない。よって、キャリア教育が当初の目的であった「初等中等教育と高等教育との接続の改善」に資する教育になっていたかどうかを検証することは難しい。

そこで本稿では、中等教育のキャリア教育に対する大学生の評価、中等教育のキャリア教育に

対する評価と大学に望むキャリア教育の関連、大学進学理由と中等教育のキャリア教育に対する評価や大学のキャリア教育に対する期待の関連を、本学の学生に対する調査から明らかにする。これにより、中等教育と高等教育の接続の観点をふまえた大学のキャリア教育のあり方について示唆を得ることを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。まず、中等教育のキャリア教育に対する卒業生の評価を扱った先行研究を整理し、先行研究の課題と本稿における分析課題を示す（第2節）。次に、本調査の概要について述べる（第3節）。さらに、第2節で設定した分析課題に対して得られた結果を示し、考察を行う（第4節）。最後に、本稿のまとめを行い、キャリア教育に対する示唆と今後の課題を述べる（第5節）。

2. 先行研究

中等教育に限らず、キャリア教育の効果検証は在校生に対して授業前後に行う質問紙調査が中心である（例えば、山田 2009, 正木 2023 など）。数少ない卒業生への調査としては、中学生・高校生とそれぞれの前年度卒業生が、キャリア教育をどのように評価しているのかを調査した国立教育政策研究所（2013）がある。この調査によると、中学生にとって自分の将来の生き方や進路を考える上で「役に立った」項目の上位3つは、「様々な教科における日々の授業」56.9%、「部活動などの課外活動」54.5%、「職場での体験活動」50.2%であり、前年度中学卒業者のうち「役に立った」項目の上位3つは、「部活動などの課外活動」67.5%、「様々な教科における日々の授業」63.5%、「卒業後の進路（進学や就職）についての相談」52.0%であった。一方、高校生にとって自分の将来の生き方や進路を考える上で「役に立った」項目の上位3つは、「部活動などの課外活動」50.8%、「様々な教科における日々の授業」41.4%、「上級学校（大学、短期大学、専門学校等）の訪問や見学・調査」36.5%であり、前年度高校卒業者のうち「役に立った」項目の上位3つは、「部活動などの課外活動」60.2%、「卒業後の進路（進学や就職）についての相談」55.6%、「卒業後の進路（進学や就職）に関する情報の入手方法とその利用の仕方」50.1%であった。これらの結果を見る限り、中学生・高校生とその卒業生たちにとって自分の将来の生き方を考えるうえで「役に立った」ことは、日々の授業や部活動などの課外活動であり、職場体験や職業人講話のような「キャリア教育」として行われるようになった特別な活動よりも、キャリア教育が導入される前から行われてきた教育活動に対してキャリア教育としての効果を実感しているといえる。

では、高等教育進学者は初等中等教育におけるキャリア教育をどのように評価しているのだろうか。長谷川（2018a）は、大学生（167名）と専門学校生（23名）に対して、進路学習の記憶と評価に関する回顧調査（質問紙）を実施した。その結果、①回答者の約8割が小学校の進路学習を覚えていないと回答していたこと、②男性に比べると女性の方が進路学習に対する記憶や評価は高いこと、③大学生よりも専門学校生の方が小学校・中学校の進路学習の記憶や評価は高かったことを明らかにしている。そのうえで、①については、遠い過去の記憶が薄れているというだけでなく、小学校のキャリア教育は具体性を欠いているため分かりにくかったのではないか、

②③については、性差や進路（大学／専門学校）によってキャリア教育に対する記憶や評価に差があるのではないかと考察している。さらに、長谷川（2018b）は、大学生 421 名に対して質問紙による回顧調査を実施し、初等中等教育のキャリア教育に対する評価の高い者は、大学のキャリア教育を肯定的に捉えていること、高校のキャリア教育に対する評価の高い者は、大学進学を考える際に将来の職業を意識して進路選択をしていたこと、理系より文系の学生のほうが、「学校の学習は将来の就職と結びついていないと意味がない」と考えている学生が多いことを明らかにしている。これらの知見は、学校段階が進むほどキャリア教育の具体性と有用感が高まること、初等中等教育におけるキャリア教育への評価は、大学におけるキャリア教育への評価に影響を及ぼしていること、調査設計時には性差や進路、文系理系の違いを考慮する必要があることを示唆する。

社会人が高校時代のキャリア教育をどのように評価しているのかを明らかにした研究としては中井（2022）がある。中井（2022）は、A 女子高校卒業生 25 人に対する聞き取り調査の結果から、高校時代に受けた教育は直接的には現在のキャリア選択のきっかけにはなっていないこと、キャリア意識は直近の進路選択（大学進学）に向いており、結婚などのライフキャリアについての意識は高くないということ、授業で出会ったロールモデルや、レーン別授業（併設大学で行われている外国語や看護栄養、観光文化など、比較的女子のニーズが高い授業を生徒が選択し、受けてみる）がキャリア形成に一定の影響を及ぼしていたこと、成績上位者のキャリア意識は高く、専門学校進学者のキャリア意識は低い傾向があること（但し、成績下位であっても高卒就職者のキャリア意識は明確であった）を明らかにしたうえで、高校におけるキャリア教育を検討する際には、職業に限定されないより広い視野でのプログラムが必要であること、レーン別授業は成績だけに依拠しないキャリア意識の醸成に繋がっている可能性があることを指摘している。

しかし、国立教育政策研究所（2013）は卒業生に対する調査を行なっているが、回答者の特性と評価項目の関連は明らかにしていない。また、卒業生の中には高等教育に進学することなく就職したものや進路未定の者を一定数含んでいるため、「初等中等教育と高等教育の接続」の観点からキャリア教育を評価することは難しい。次に、長谷川（2018a、2018b）は大学生や専門学校生が初等中等教育におけるキャリア教育をどのように記憶・評価しているのかを回顧調査から明らかにしているが、様々な方法で行われているキャリア教育を一括りにして扱っているため、学生がどのようなキャリア教育を想定して回答したのかわからない。最後に、中井（2022）が調査対象としたのは、高校を卒業してから 5 年～12 年経過した社会人であり、高校時代のキャリア教育に対する記憶は曖昧な可能性がある。

そこで本稿では、(1) 本学における学生の特徴、を明らかにしたうえで、(2) 中学・高校のキャリア教育に対する評価と大学に期待するキャリア教育の関連、(3) 中学・高校のキャリア教育に対する評価と大学に期待するキャリア教育の関連、(4) 大学進学理由と中学・高校のキャリア教育に対する評価や大学に期待するキャリア教育の関連、を明らかにする。大学教育に対する「かまえ」は学習効果に違いをもたらすと言われているように（金子 2007）、どのような理由で大学に進学してきたのか、キャリア教育に対する期待や評価に影響を及ぼすと考えられる。よって (4)

では、大学進学理由を変数として分析を行うこととする。

3. 調査の概要

本調査は、2023年4月13日～24日に、本学の全学共通履修科目として開講している「キャリアの形成」と「インターンシップ概論」の受講生を対象に行った。これらの授業は複数の教員によって展開されていることから、教員2名の協力を得て、3クラスずつ、計6クラスで調査を実施した。「キャリアの形成」は1年生を主たる対象者とする授業であり、3クラスの履修者合計は152名である。「インターンシップ概論」は2・3年生を対象とする授業であり、3クラスの履修者合計は146名である。調査の依頼は授業中に行い、授業中もしくは授業終了後にWeb上で回答してもらった。回答者数は111名、回答率は37.2%である。

質問項目のうち、中学・高校時代に受けたキャリア教育については、国立教育政策研究所（2009）を参照しながら代表的なキャリア教育・進路指導の取り組みを選び、項目を設定した。大学への進学理由については、ベネッセ教育総合研究所（2005）を参考に、大学に望むキャリア教育については、文部科学省（2021）を参考に項目を設定した。分析には、SPSS Statics.29を使用した。以後、割合を示す際には小数点第二位以下を切り捨てて示す。

4. 結果と考察

(1) 回答者の特徴

まずは、回答者111名の特徴を確認する。性別は男性25.2%、女性73.8%、未回答0.9%であり、回答者が女性に偏っている。しかし、本学の男女比が約3:7であることを考慮すれば（愛知淑徳大学受験生応援サイト）、本学の実態を捉えていると言えるだろう。所属学部は、創造表現学部（18.0%）、交流文化学部（18.0%）、ビジネス学部（16.2%）、人間情報学部（13.5%）、心理学部（12.6%）、健康医療学部（3.6%）、福祉貢献学部（6.3%）、文学部（6.3%）、グローバルコミュニケーション学部（4.5%）、未回答（0.9%）である。

次に、出身高校は「進学校」（ほとんどの生徒が進学する高校）が63.9%、「進路多様校」（専門学校や就職など多様な進路に進む高校）が36.0%であった。進学校出身者71名の、中3時成績はやや高く（5段階で「上のほう」21.1%「中の上」39.4%）、高3時成績はやや低い（5段階で「中くらい」33.8%「中の下」25.3%「下の方」12.6%）。一方、進路多様校出身者39名の、中3時成績はやや低く（5段階で「中くらい」33.3%「中の下」25.6%「下のほう」12.8%）、高3時成績はやや高い（5段階で「上の方」31.5%「中の上」28.9%「中くらい」36.8%）。つまり、中3時成績のやや高い者が進学校に、やや低い者が進路多様校に進み、進学校では成績のやや低かった学生が、進路多様校では成績のやや高かった学生が本学に入学しているといえる。さらに、進学校出身の学生は一般入試を（49.2%）、進路多様校出身の学生は推薦入試を経て（55.0%）入学している傾向がある。

最後に、大学と学部の希望度を確認しておく。本学の志望度を5段階で尋ねたところ、「第1志望である（愛知淑徳大学以外の志望校はなかった）」と回答した者は49.5%であり、学部の志

望度についても「第1志望である（所属学部以外の第1志望はなかった）」と回答した者が81.1%であった。多くの回答者にとって本学・学部は第1志望であったといえる。

(2) 中学・高校のキャリア教育に対する評価と大学に期待するキャリア教育

では、回答者たちは中学・高校のキャリア教育をどのように評価しているのだろうか。中学におけるキャリア教育のうち、「非常に役に立った」と「役に立った」を合わせた上位3つの項目は、「職場体験」(77.4%)、「学校行事」(67.5%)、「個人面談」(66.6%)であり、高校におけるキャリア教育のうち「非常に役に立った」と「役に立った」を合わせた上位3つの項目は、「個人面談」(77.4%)、「大学体験入学」(75.6%)、「総合的学習時間のキャリア教育」(71.1%)であった。回答者の多くは、中学・高校のキャリア教育のうち、体験を重視した（職場体験や大学体験入学）、直接的（個人面談）なキャリア教育を肯定的に評価していたことが明らかになった。さらに、大学に期待するキャリア教育としては、「今後の将来の設計を目的とした授業」(72.9%)、「インターンシップを取り入れた授業」(47.7%)、「社会・経済の仕組みに関する知識の修得を目的とした授業」(43.2%)の順に多かった。回答者たちは、直接的で具体的な授業を通じて、自分が抱えている将来への不安を大学が解消してくれることを期待していると考えられる。

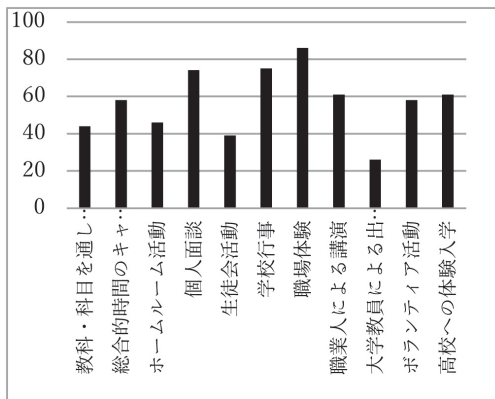


図1 役に立ったキャリア教育（中学校）

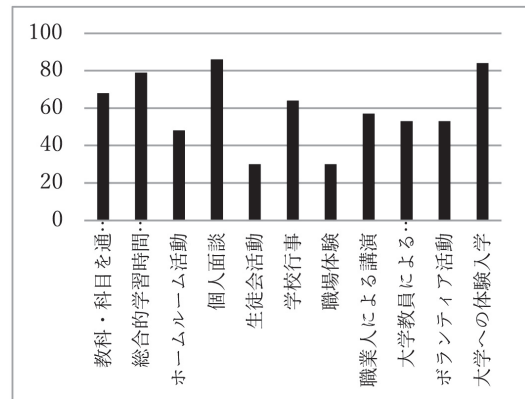


図2 役に立ったキャリア教育（高校）

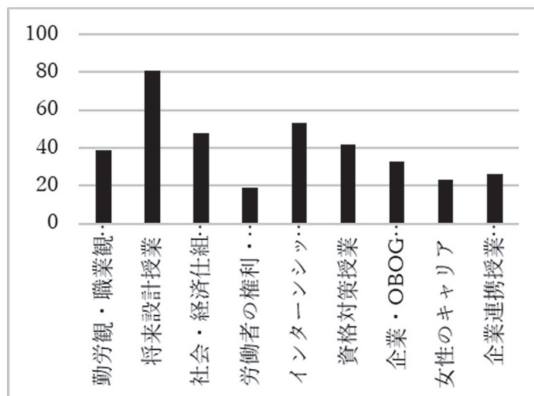


図3 大学に期待するキャリア教育

(3) 中学・高校のキャリア教育と大学に期待するキャリア教育の関連

では、中学・高校におけるキャリア教育のうち、肯定的に評価する項目と、大学に期待するキャリア教育に関連はあるのだろうか。(2) で得られた結果に対して因子分析を行ったところ、中学校のキャリア教育は、「職場体験」「職業人による講演」「大学教員による出前授業」から構成される因子（以下、「中学_学校外選好」とする）、「教科/科目キャリア教育」「総合的時間キャリア教育」「個人面談」から構成される因子（以下、「中学_担任選好」とする）、「生徒会活動」「学校行事」「高校への体験入学」「ホームルーム活動」から構成される因子（以下、「中学_特別活動選好」とする）の3つが抽出された（表1）。また、高校のキャリア教育は、「職場体験」「職業人による講演」「大学教員による出前授業」「ボランティア活動」から構成される因子（以下、「高校_学校外選好」とする）、「教科/科目キャリア教育」「総合的時間キャリア教育」「個人面談」「大学体験入学」から構成される因子（以下、「高校_担任選好」とする）、「生徒会活動」「学校行事」「ホームルーム活動」から構成される因子（以下、「高校_特別活動選好」とする）の3つが抽出された（表2）。大学に望むキャリア教育についても因子分析を行ったところ、「勤労観/職業観育成科目」「将来設計科目」「労働者の権利/義務、労働法知識科目」から構成される因子（以下、「大学_授業選好」とする）、「企業関係者・OB/OG講演」「女性のキャリア」「社会経済の仕組み科目」から構成される因子（以下、「大学_ロールモデル選好」とする）、「企業連携授業」「インターンシップ科目」「資格取得・就職対策科目」から構成される因子（以下、「大学_企業体験選好」とする）の3つが抽出された（表3）。

次に、因子同士の関連の強さを分析した結果が表4である。表4からは、中学校のキャリア教育3因子と高校のキャリア教育3因子は関連が強いこと、中学校のキャリア教育3因子と大学のキャリア志向3因子には若干の関連はあるが（「中学_体験活動選好」因子と「大学_授業選好」因子は負の相関、「中学_特別活動選好」因子は、「大学_ロールモデル選好」因子と負の相関）、あまり関連は見られないことが読み取れる。さらに、高校のキャリア教育3因子と大学のキャリア志向3因子には有意な相関がない。回答者にとって、中学・高校で「役に立った」と思うキャリア教育と、大学に望むキャリア教育は異なると考えられる。

表1 中学校のキャリア教育 因子分析

	因子①	因子②	因子③
中学_職場体験	0.455	0.069	0.222
中学_職業人による講演	0.761	0.229	-0.049
中学_大学教員による出前授業	0.72	0.204	0.102
中学_ボランティア活動	0.502	0.235	0.348
中学_教科/科目を通したキャリア教育	0.237	0.504	0.128
中学_総合的時間のキャリア教育	0.129	0.915	0.179
中学_個人面談	0.167	0.567	0.103
中学_生徒会活動	0.476	-0.011	0.496
中学_学校行事	0.149	0.187	0.809
中学_高校への体験入学	0.417	0.191	0.423
中学_ホームルーム活動	-0.001	0.435	0.539

表2 高校のキャリア教育 因子分析

	因子①	因子②	因子③
高校_職場体験	0.609	0.119	0.452
高校_職業人による講演	0.673	0.314	0.224
高校_大学教員による出前授業	0.69	0.374	0.143
高校_ボランティア活動	0.666	0.199	0.139
高校_教科/科目を通したキャリア教育	0.322	0.463	0.187
高校_総合的時間のキャリア教育	0.259	0.699	0.316
高校_個人面談	0.12	0.661	0.206
高校_大学への体験入学	0.243	0.575	0.072
高校_生徒会活動	0.331	0.113	0.51
高校_学校行事	0.438	0.23	0.508
高校_ホームルーム活動	0.066	0.365	0.753

表3 大学に望むキャリア教育 因子分析

	因子①	因子②	因子③
勤労観/職業観の育成を目的とした授業科目	0.389	0.004	0.046
今後の将来の設計を目的とした授業科目	0.297	-0.034	0.029
労働者としての権利/義務等、労働法制上の知識の修得を目的とした授業科目	0.733	0.251	0.136
企業関係者・OB/OG等の講演	-0.03	0.634	0.068
女性の多様なキャリアを意識したもの等男女共同参画の視点をふまえたキャリア教育	0.061	0.542	0.166
社会や経済の仕組みに関する知識の修得を目的とした授業科目	0.258	0.355	0.242
大学と企業等とで連携して実施する、企業の課題解決や商品開発等を題材とした授業	0.294	0.088	0.745
インターンシップを取り入れた授業科目	-0.079	0.22	0.426
資格取得/就職対策等を目的とした授業科目	0.157	0.055	0.17

表4 中学・高校のキャリア教育に対する評価と大学に期待するキャリア教育の関係

		相関								
		中学校キャリア教育 因子_体験選択	中学校キャリア教育 因子_担任選択	中学校キャリア教育 因子_特別活動選択	高校キャリア教育 因子_学校外選択	高校キャリア教育 因子_担任選択	高校キャリア教育 因子_特別活動選択	大学への希望キャリア 教育_大学授業選択	大学への希望キャリア 教育_ロールモデル	大学への希望キャリア 教育_企業体験選択
中学校キャリア教育因子_体験選択	Pearsonの相関係数	1	.050	.078	.506**	.146	.289**	-.188*	.105	.018
	有意確率(両側)		.604	.418	<.001	.127	.002	.048	.271	.855
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
中学校キャリア教育因子_担任選択	Pearsonの相関係数	.050	1	.069	.338**	.509**	.093	.106	.098	-.077
	有意確率(両側)	.604		.474	<.001	<.001	.329	.266	.305	.419
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
中学校キャリア教育因子_特別活動選択	Pearsonの相関係数	.078	.069	1	.201*	.292**	.628**	-.013	-.222*	.022
	有意確率(両側)	.418	.474		.034	.002	<.001	.894	.019	.817
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
高校キャリア教育因子_学校外選択	Pearsonの相関係数	.506**	.338**	.201*	1	.136	.108	-.010	.008	-.114
	有意確率(両側)	<.001	<.001	.034		.153	.259	.915	.934	.235
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
高校キャリア教育因子_担任選択	Pearsonの相関係数	.146	.509**	.292**	.136	1	.169	.124	.131	.013
	有意確率(両側)	.127	<.001	.002	.153		.077	.194	.171	.893
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
高校キャリア教育因子_特別活動選択	Pearsonの相関係数	.289**	.093	.628**	.108	.169	1	-.051	-.098	.165
	有意確率(両側)	.002	.329	<.001	.259	.077		.596	.308	.084
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
大学への希望キャリア教育_大学授業選択	Pearsonの相関係数	-.188*	.106	-.013	-.010	.124	-.051	1	.116	.180
	有意確率(両側)	.048	.266	.894	.915	.194	.596		.227	.059
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
大学への希望キャリア教育_ロールモデル	Pearsonの相関係数	.105	.098	-.222*	.008	.131	-.098	.116	1	.141
	有意確率(両側)	.271	.305	.019	.934	.171	.308	.227		.141
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111
大学への希望キャリア教育_企業体験選択	Pearsonの相関係数	.018	-.077	.022	-.114	.013	.165	.180	.141	1
	有意確率(両側)	.855	.419	.817	.235	.893	.084	.059	.141	
	度数	111	111	111	111	111	111	111	111	111

**, 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

*, 相関係数は 5% 水準で有意(両側)です。

(4) 大学進学理由と中学、高校、大学のキャリア教育との関係

最後に、大学進学理由と中学校のキャリア教育3因子と、高校のキャリア教育3因子、大学のキャリア志向3因子の関係を確認する。図4は、大学に進学した理由を示したものである。進学理由の上位3つは、「大卒の学歴が欲しいから」(68.5%)、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」(64.9%)、「すぐに社会に出るのが不安だから」(41.4%)であった。また、「好きな勉強がしたいから」「興味のある分野だったから」「なりたい職業があったため」については、回答者は1人(0.9%)だけであった。この結果からは、回答者たちが、大学に進学することは大卒の学歴を取得し、将来の仕事に役立つと認識している一方で、大学で具体的に何を学びたいのか、将来何になりたいのかは曖昧であることを示唆する。

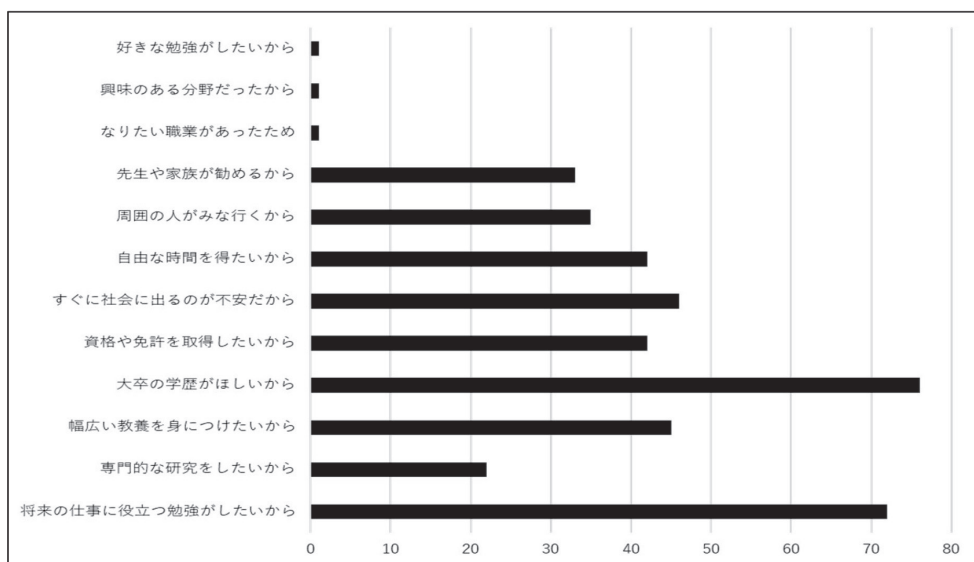


図4 大学に進学した理由

さらに、中学校のキャリア教育3因子と、高校のキャリア教育3因子、大学のキャリア志向3因子の各因子得点の平均値に、大学進学理由の各項目を選択したか否かによる差があるかどうかについて、対応のないt検定を用い検証した（なお、「なりたい職業があったから」「興味のある分野だったから」「好きな勉強がしたいから」については、選択者が1名のみであったため、t検定による検証は行わなかった）。その結果、5%水準で有意な差が見られた項目は次の通りである。

まず、「自由な時間を得たい」という理由で大学に進学した学生は、それ以外の学生に比べ、「中学_担任選好」因子の得点が高い一方で、「将来の仕事に役立つ勉強がしたい」という理由で大学に進学した学生は、それ以外の学生に比べ、「高校_担任選好」因子の得点が高かった。つまり、同じように教員が知識を直接与えるようなキャリア教育を好んでいても、それが中学なのか高校なのかによって大学進学理由との関連は異なることが明らかになった。これは、中学と高校のキャリア教育の目的や内容の違いを示している可能性がある。中学とは異なり、高校では進学に際して特定の学部を選ぶ必要がある。よって、高校ではより具体的で直接的な進路指導がキャリア教育で行われているため、そのような教育を好む学生は、大学でも進路選択に役立つ、具体的で直接的なキャリア教育を求めている可能性がある。

次に、「大卒の学歴が欲しいから」という理由で進学した学生は、それ以外の学生に比べて、「大学_授業選好」因子の得点が高い一方で、「専門的な研究をしたいから」を選択した学生は、それ以外の学生に比べ、「大学_ロールモデル選好」因子と「大学_企業体験選好」因子の得点が高かった。このことは、大学の専門教育に対する期待の強弱が関係している可能性を示している。「大卒の学歴が欲しいから」という理由で進学した学生は、専門教育に対する期待が弱いため、特定の職業につながるような知識や経験よりも、幅広い職業で必要となるような汎用的な知識を求め一方で、「専門的な研究をしたいから」という理由で大学に進学した学生は、専門教育に

対する期待が強いため、キャリア教育に対しても特定の職業につながるような具体的な知識や経験を求めていると考えられる。

最後に、「周囲の人が皆行くから」という理由で進学した学生は、それ以外の学生に比べ、「大学_ロールモデル選好」因子の得点が高く、「先生や家族が勧めるから」という理由で進学した学生は、それ以外の学生に比べ、「大学_授業選好」因子と「大学_ロールモデル選好」因子の得点が高かった。自分の考えに基づいて行動する学生よりも、周囲の人の考えを参照しながら／周囲の人の考えに従って行動する学生は、ロールモデルを望む傾向があり、中でも特に権威ある他者（保護者や教師）の意見を重視する学生は、教員から知識を与えられるような大学らしい、講義型のキャリア教育を望む傾向があると考えられる。

以上の結果から浮かび上がるのは、伝統的な学生像とは異なる学生の姿である。大学進学率が低く、一部の少数エリートのみが大学に進学していた時代であれば、学生を「独自の判断をすることのできる成人であり、大学で学ぶ上で必要となる学力・社会認識・自己認識がある」（金子 2007）者とみなし、「学生の自律的な知的探求」に基づいた教育（金子 2007）を行うことが出来た。しかし、大学進学率が上昇し、進学が「万人の義務」（トロウ訳書 1976）となった今、このような伝統的な学生ばかりが大学に進学するわけではない。本調査においても、回答者の 36.0% が進路多様校出身であること、大学進学理由としては「大卒の学歴が欲しいから」（68.5%）、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」（64.9%）、「すぐに社会に出るのが不安だから」（41.4%）が多く、「好きな勉強がしたいから」「興味のある分野だったから」「なりたい職業があったため」を選択した学生は 0.9% しかいなかったこと、大学に将来の不安の解消を期待するようなキャリア教育を求めていたことが明らかになった。この結果は、本学においても現代的な学生が増えつつあることを示しているといえるだろう。

5. 終わりに

本稿では、中等教育と高等教育の接続の観点から大学におけるキャリア教育の在り方を検討するために、本学のキャリア教育科目受講者を対象に質問紙調査を行った。その結果、(1) 進学校出身者と進路多様校出身者の割合は、63.9%と 36.0%であり、進学校の中では成績のやや低い者が一般入試を経て、進路多様校の中では成績のやや高い者が推薦入試を経て本学に入学していた。(2) 中学・高校のキャリア教育としては、体験を重視した（職場体験）直接的（個人面談）な教育を肯定的に評価する傾向があった。(3) 中学・高校で「役に立った」キャリア教育と、大学に期待するキャリア教育は異なることが示された。(4) 大学進学理由によって、学生が大学に求めるキャリア教育の内容は異なり、「将来の仕事に役立つ勉強がしたい」という理由で進学した学生は、それ以外の学生に比べて、進路選択に役立つ具体的で直接的なキャリア教育を求める傾向のあること、「大卒の学歴がほしい」という理由で大学に進学した学生は、特定の職業につながるような知識や経験よりも、幅広い職業で必要となるような汎用的な知識を求める傾向のあること、「周囲の人が皆行くから」という理由で進学した学生は、教員から知識を与えられるような大学らしい講義型のキャリア教育を望む傾向のあることが明らかになった。

本研究で得られた知見が本学のキャリア教育に与える示唆は以下の通りである。本学の学生は大卒学歴の有効性を認識している一方で、何かを学ぶため、特定の職業に就くために進学したという学生は少ないこと、学生が特定の職業につながるような知識や経験を求めるか否かによって、期待するキャリア教育の内容は異なることが明らかになった。よって、なりたい職業があることを前提としたキャリア教育は、学生を追い込んでしまう可能性がある。全学のキャリア教育にも専門教育重視の学生のニーズに応えるキャリア教育（学部への配慮）が必要であると同時に、学部が開講するキャリア教育においてもその学部の典型的な進路を過度に強調しないキャリア教育を行う配慮が必要だと考えられる。また、本学の学生の中には、自分の考えよりも周囲の人の考えを参照しながら／周囲の人の考えに従って行動する学生もいた。そのような学生にとって、「あなたはどうか考えるのか」「あなたはどうかしたいのか」と問い詰め、自分の考えを表現させることや、自己分析を一人で行わせることは学生を追い込んでしまう可能性がある。自分で考え、考えたことを表明できるようにするためには、初年次からの段階的な教育・支援や、学生とともに伴走するようなキャリア支援も必要だと考えられる。

本研究の限界としては、調査対象者が必修科目ではないキャリア教育科目受講者のみであるということである。その結果、中学・高校時代のキャリア教育に対して肯定的な評価を有する者が回答者の多くを占めている可能性は否定できない。さらに、中学・高校時点の学力は自己評価にすぎない。学生がどのような学習経験を経て本学に入学してきたのか、大学に対してどのようなニーズを持っているのかを明らかにするための、全学生を対象とした調査（学力調査を含む）を継続的に行うことが求められる。

今後の課題としては他大学生との比較（本知見は本学に固有のものなのか、現在の大学生に共通で該当するものなのか）、大学に希望するキャリア教育と卒業後の進路志望の関連、大学における授業経験が学生の求めるキャリア教育に及ぼす影響などが挙げられる。

（本稿は中部教育学会にて口頭発表した内容を再編したものである。）

参考文献

「愛知淑徳大学受験生応援サイト ASNAVI『なんでも Q&A』」

<https://www.aasa.ac.jp/welcome/nyuusi/qa/>（2024/1/26 閲覧）

ベネッセ教育総合研究所（2005）「進路選択に関する振り返り調査 - 大学生を対象として -」

https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/shinrosentaku/2005/houkoku/furikaeri2_1_1.html（2023/10/27 閲覧）

長谷川誠（2018a）「初等・中等教育の進路指導、キャリア教育における進路学習に関する実証的研究」『佛教大学教育学部学会紀要』第17号、pp.141-150.

長谷川誠（2018b）「キャリア教育政策の展開と今日的課題 - 初等中等教育から高等教育への接続を視点に -」『神戸松蔭女子学院大学研究紀要 人間科学部篇』7巻、pp.27-41.

金子元久（2007）『大学の教育力 - 何を教え、学ぶか（ちくま新書） -』

国立教育政策研究所（2009）「キャリア教育」資料集 研究・報告・手引編〔平成21年度増補版〕

<https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/21career.shiryou/21career.shiryou.htm>
(2023/10/27 閲覧)

国立教育政策研究所 (2013) 「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」

https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/career-report.htm (2023/10/27
閲覧)

正木澄江 (2023) 「高校生に対するキャリア学習の実践的効果」『人間科学研究』(44), pp.7-16.

文部科学省 (2021) 「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について」

https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf (2023/10/27 閲覧)

中井咲貴子 (2022) 「女子に特化したキャリア教育がその後のキャリア形成に与える影響 - 女子
校卒業生への聞き取り調査から -」『キャリアデザイン研究』 Vol.18, pp.131-137.

杉谷祐美子 (2015) 「日本のユニバーサル化の担い手は誰か」『大学時報』 pp.32-37.

トロウ, M. (1976) 『高学歴社会の大学 - エリートからマスへ -』 天野郁夫・喜多村和之訳, 東京大
学出版会。

山田智之 (2009) 「キャリア教育が中学生のキャリア発達に及ぼす心理学的影響と効果に関する
研究」『季刊 進路指導』 82(1), pp.15-26.